

# 黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.91 (September 30, 2021)

第91号 2021年9月30日

## 例会発表要旨

4月例会 2021年4月27日 オンライン開催 (Zoom)

### ① 道化イアゴー:クリスティ・ミンストレルズの笑劇「オセロ」の笑いと転覆

猪熊 慶祐(立命館大学・院)

本発表は、クリスティ・ミンストレルズの笑劇「オセロ」におけるイアゴーの道化としての役割とそれによってもたらされる笑いについて考察をおこなった。

デイヴィッド・ローディガーによる *The Wages of Whiteness* (1991)以降、ミンストレル・ショーのオセロは、黒人訛を過度に強調し、暴力的な自分物として表象されるとされてきた。それゆえ、ローディガー以降の先行研究においてもこの視点を踏襲した議論がみられる。しかしながら、これら先行研究が対象とするのはミンストレル・ショーの演目としては二人のミンストレルが繰り広げる漫才のネタの中に登場するオセロについてであり、シェイクスピア作品の翻案に登場するオセロではない。シェイクスピア作品の要所をつなぎ合わせた笑劇「オセロ」の脚本で現在入手可能なのは、クリスティズ・ミンストレルズの脚本家 G. W. H. グリフィンによるものに限る。本発表では、このクリスティズの脚本をもちいて観客を笑わせる中心的な人物であるイアゴーについての分析を行った。

笑劇「オセロ」は、アフリカ系のオセロ、デズデモーナ、そしてアイルランド系のイアゴーの三名が男女の三角関係を巡る設定に落とし込まれている。イアゴーはオセロとデズデモーナの安定した仲を壊すことに奔走するトリックスターの役割を担う。イアゴーは、貶めるはずの相手オセロからその都度ツッコミをうけることで、観客に向けてその策が失策であることが明かされ笑われる。つまり、作中、彼は自身の策に溺れ絶えず失敗を重ねるのだ。イアゴーは終始くりかえす失敗により彼が望む結果を手中に収めることができずに作品は幕を閉じることから、笑劇「オセロ」において笑われる中心的な人物はアフリカ系のオセロではなく、トリックスターの特徴を持つアイルランド系のイアゴーであるとした。

## ② 禁じられたクラブへの招待状——モリスンの「黒人」大統領発言を再読する

深瀬 有希子(実践女子大学)

「初の黒人大統領」—この言葉は、ビル・クリントンがモニカ・ルウインスキーとの「不適切な」関係を認めてからおよそ一か月半後の 1998 年 10 月に、トニ・モリスンが *The New Yorker* で発表した論考に出てくるものである。しかし、この表現が含まれる文全体—“Years ago, in the middle of the Whitewater investigation, one heard the first murmurs: white skin notwithstanding, this is our first black President.”—における“one heard the first murmurs”の役割や、この論考の後半でモリスンが提示する、アフリカン・アメリカン(特に男性)を常にすでに取り締まっている権力の存在についてはあまり論じられてこなかった。よって本発表では、タナハシ・コーツによる批評(2015 年 8 月 *The Atlantic*)に依拠する形で、考察をすすめた。コーツは、ポスト・レイシャル言説のなかで顕在化したニュー・ジム・クロウ、そしてそれに対抗するかたちで展開したブラック・ライヴス・マター運動を背景にして論ずる。コーツは、1998 年のモリスンの件の発言はクリントンを賛辞し彼をアフリカン・アメリカンの社会に受け入れることを意図したものではない、と言う。そうではなく、それは存在すべきではないクラブへの招待、すなわち、白いアメリカへの痛烈な批判である、と主張する。これにもとづき、「不適切な」関係をピューリタニズム的倫理観によって批判する白いアメリカの言論にモリスンが見たのは、大統領さえをもその権力の座から引きずりおろし監獄にさえも送ることができる権力であり、モリスンは「初の黒人大統領」というイデオロムによってその権力の発現に対する「恐れと怒り」を示したと説明し、本論考を再読する意義を確認した。

## ③ Teaching About BLM Movement & Its Historical Background

加藤 恒彦(立命館大学)

本発表では、立命館大学・国際関係学部 1 回生の English for International Studies III (theme based)で行った教育実践の概要を説明した。(すべて Zoom による on-line 授業)。

EISIII では、国際的に話題となっている 이슈を英語で学ぶという学部の創立理念に立ち、今、国際的にも注目されている BLM 運動と、その歴史的背景について 30 回に渡り、英語で講義した。

この講義で扱ったのは、①イギリス・アフリカ・カリブを結ぶ奴隷三角貿易とアフリカ人奴隷を使役したカリブ奴隷制がイギリスの産業革命に必要な資本の原始的蓄積(『資本論』カール・マルクス)に貢献したと論じた古典的著作 Eric Williams の *Capitalism & Slavery*(1944)の紹介、②アメリカ史は、人種差別の歴史と不可分であるという前提に立ち、その歴史を奴隷制・南北戦争・南部における人種隔離制度の確立、公民権運動とその成果、公民権運動以降の現代までの展開を、様々なアメリカの歴史家の研究に基づき、通史的に論じると共に、BLM 運動については、その指導者の一人 Patrisse Khan-Cullors の自伝的著作 *When They Call You a Terrorist: A Black Lives Matter Memoir* (2019)の紹介を行った。

学生に課した課題は、①と②のそれぞれについて 2,000 字の英文レポートの作成であり、①については「奴隷貿易と奴隷制が、いかに産業革命に貢献したのか」というテーマを課し、②については、学生が自由にテーマを選び、それについて論じさせた。その結果 1, 2 名の脱落者は出たものの、数名の A+ を含め、正常な成績分布が見られた。

私が担当した英語クラスは、上級クラスで学習意欲も高く、email による授業後の質問も毎回寄せられ、その次のクラスの冒頭でそれについて扱った。

この授業を通じて、国際問題を英語文献を通じ学び、英語で発信する力を養成するという課題に少しでも貢献できればという気持ちで行った。

## 会員からの投稿

コロナ禍において思うこと一肌で学ぶ価値

河野 世莉奈 (福岡大学)

今年度の前期に担当した学生たちは、ほとんどが2001年9月11日の同時多発テロ事件を直接的には知らない年齢だった。とくに意識はしていなかったのだが、アメリカ史を概観しながら英語を学んでいこう、という趣旨の授業をしていて、その部分に触れたとき、今18歳や19歳であるということとは、ふと気づいたのである。多少戸惑いながらも、そのときは当時私が抱いた感想を簡潔に伝えて、テキストの内容を確認するだけに留めた。(遠隔授業のため、学生はカメラをオフにしている、彼らの反応がいまいち把握できていないのは非常に残念である。)

今年であれからちょうど20年が経ったことになる。ニューヨークのとても背の高いビルに飛行機が突っ込んでいく映像をテレビで見たときのあの衝撃は、今でも忘れられない。今年も、9月11日当日は多くのメディアが追悼式典の様子を報道していた。あのとき、確か1年後にはバリ島で爆弾テロが起こった。まだ中学生だった私は、これから世界はどうなっていくのだろう、と目に見えぬ不安にやたら苦しめられ、第3次世界大戦なんてことになりませんように、とひたすら祈っていた。高校生になり、アメリカに住んでいる同世代の著者によるある1冊の本(岡崎玲子、2004『<sup>ナイン・イレヴン</sup>9・11ジェネレーション—米国留学中の女子高生が学んだ「戦争」』、集英社新書)を読んで、現地ではテロ当日、皆がパニックに陥っていたことや、現地の高校生たちは報復をすべきかすべきでないかについての討論を頻繁に行っていたことなどを知った。テレビなどのニュースで得ていた情報と、著者の体験談とのあまりにも異なる緊迫感にただただ圧倒され、実際に現地でその緊迫感を肌で感じた著者に漠然としたあこがれを抱いたことをよく覚えている。

学部時代のゼミで黒人史を学んだことがきっかけとなり、大学院に進学しアフリカン・アメリカン文学研究を志すようになったのだが、修士課程在籍中にはアメリカ南部のジョージア大学に約1年の交換留学へ行く機会を持つことができた。到着した当日にはさっそく、泊まったホテルのエレベーターの中で、乗客のうちアジア人は私一人であることにふと気づき、このアメリカという大国の中ではいつでも自分がマイノリティになりうることを思い知らされた。それまで海外経験があまりなかったことも大きく影響しているだろうが、このように自分が日本人であることを痛感させられる場面に遭遇することはしばしばあった。気候は地元福岡とよく似ており、3人のルームメイトや現地ですぐれた友達とともに楽しい日々を送ることができた。膨大な量の課題に追われながらも、学生によるプレゼンテーションやディスカッションが頻繁に行われる授業にはとても刺激を受けた。とりわけアフリカン・アメリカン文化の授業で奴隷制を扱ったときには、年齢・人種を問わず意見をぶつけ合う学生たちの姿を目の当たりにした。また、その授業での一人の学生による発言、「私は家族の中で唯一大学に入学した人間なのだ」という言葉は今でもよく記憶している。アメリカにおける経済格差、人種間において格差が生じていることについてはある程度の知識は得ていたものの、生の声を聴くことができ、日本で文献を読み漁っているだけでは得られない感覚を体感することができた。ちょうど大統領選挙の年で、支持政党の缶バッチをリュックにつけて歩いている学生や同じ政党を支持している

者同士でパーティーをしている様子も、日本では見ることはできない光景だった。あの留学経験からすでに9年が経過しているものの、あらゆることが思い出されてきて本当に素晴らしい経験ができたかと改めて実感している。

実際に現地へ行って、その場の雰囲気を感じること。まさかこれが制限される日が来るなんて思ってもみなかった。大学に行くことさえもはばかれる時期があることは精神的にこたえるものがある。話は戻るが、はじめに言及した授業を受講していた学生の多くは在学中の海外留学を希望しているようだった。しかし、毎回の提出課題には、「留学が無事にできるといいな」とか、「アジア人嫌悪が怖いです」など不安の入り混じったコメントが付け加えられているものが多く見られた。意欲のある学生たちが今このような状況に置かれていることは、本当に悔しくてならない。このように考えてみれば、私たちはそれぞれの時代で、内容は異なるけれど、なにかしらの目に見えぬ不安に常に駆られて生きているようである。その授業の後、同僚の先生と、そのうち3.11を知らない、という世代を教えるときが来るのだろうね、そしてこのようなことはこれから増える一方なのだろうね、という話になった。決して風化させてはならない出来事もあるが、このことに関してだけは将来、「コロナウィルスっていう大変な感染症が流行った時代があったんでしょ」というふうになればいいなと切に願う。



〔写真①〕 留学先のジョージア大学にて。9.11の文字などは全て小さなアメリカの国旗でできていた。(2012年筆者撮影)

## 入 会 者

氏名：溝辺泰雄(みぞべ・やすお)

所属：明治大学国際日本学部(アフリカ学、日本アフリカ交渉史)

自己紹介：英語圏アフリカ諸国(特に西アフリカのガーナを中心とした地域の)近現代史を中心に、アフリカ全般に関心をもちながら勉強を進めてきました。ここ10年ほどは、第二次世界大戦期を含む20世紀中葉の日本アフリカ関係史と独立期ガーナの政治指導者クワメ・ンクルマが構築した平和思想について学んでいます。これからは、アフリカにおけるパンアフリカニズムの歴史的展開について学びを深めて参りたいと考えております。よろしくどうぞお願いいたします。

氏名：阿部 啓(あべ ひらく)

所属：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻

自己紹介文：専門は20世紀アメリカ史および南部史で、特に人種と宗教の分野に関心があります。修士論文では、1960年代のミシシッピ州ジャクソンにおける白人メソジスト教会と人種関係を考察しました。博士論文ではこのテーマを引き継ぎ、公民権運動／黒人自由闘争と白人プロテスタント教会の関係を検討したいと考えています。その一部として、現在は人種の壁を越えた人々の対話と統合派ネットワークの形成に注目し、それらがジャクソン市内及び周辺地域の人種統合にどのような影響を与えたのかについて研究を進めています。

氏名：王玲玲(おう れいれい)

所属：大阪市立大学 文学研究科 言語文化学専攻

自己紹介文：専門はアメリカのマイノリティ文学です。特に多文化主義がアメリカ社会の主導的な文化思想になった1980年代以降のアフリカ系アとアジア系アメリカ文学を中心に、多文化主義、ジェンダー、セクシュアリティ、歴史、神話などを研究しています。違う文化背景の作家たちが同じ時代と社会をどのように作品で表現していることと彼らが多文化主義に対する態度を探ってゆきたいと考えています。現在はトニ・モリスンを中心に多文化主義、ジェンダー、セクシュアリティといったテーマに焦点を当て研究しています。

氏名：斉藤くるみ

所属：日本社会事業大学(言語学・英語学)

自己紹介文：最初の中世英語が専門でした。ケンブリッジ大学で古文書研究をする中、修道院手話の写本に出会いました。以来25年、ろう当事者の研究者と共に歩んできました。ギャローデット大学と連携する中、米国には白人手話と黒人手話があることを知りました。黒人の手話はろう社会で蔑まれてきましたが、実はこれが本当のろう手話なのです。白人手話は「豊かな」学校で口話(こうわ)訓練をされたろう者が話す英語と手話のピジンだったのです。白人ろう者も抑圧により自身の言語を失ったと言えます。ろう者大学と黒人大学の関係にも興味を持っています。

(順不同)

## 編集後記にかえて

2001年の同時多発テロからもう20年の時が経った。月並みな言葉であるが、はじめ目にしたときは、スケールの大きさとそれとは対照的に高層ビルのあっけない崩壊から特撮映画かと勘違いするほどであった。飛行機の衝突、ツインタワーの崩壊、高層階から身を投げる人の姿までが一晩中途切れることなくテレビから流され続けた。20年たった今も、いまだにあの衝撃を消化しきれしていない自分に気がつく。

いま私の授業を担当している学生たちは、河野氏のクラス同様に、この出来事を過去に起きたこととしてしか知らない。また、留学を希望してもコロナ感染症によってそれも容易には叶わない。そういった状況で、これまで可能であった身をもって経験する差異やそこから獲得する新たな視座は得られるのだろうか。もし可能であったとするならば、この時代に彼らが獲得するそれらは我々が経験したものと同じなのだろうか。それとも、違うのだろうか。同じである必要はないのだが、「知ること／学ぶこと」、「伝えること／教えること」、そしてそれらを合わせた「経験」を、我々が今後どのように学生へ提供できるのかを改めて考えさせられる。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部  
〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635  
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐  
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp  
ホーム・ページアドレス  
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>